

## 七

八年春、本学建築学科に所属して最初の設計製図の授業。平井聖教授がおもむろに厚手のケント紙を製図版の上に広げ水張りの方法を語り始めた。トレペをドラテで丁寧に固定、T定規を当てながら、水平線を数本左から右へ、そして勾配定規をT定規上において垂直線を下から上へ向かって線を引いた。上から下ではない。続けてホルダーの持ち方、芯の研ぎ方、消し板を使った消しゴムのかけ方、二本線の補助線を使った文字の書き方など製図の初歩を教授してくださった。大ベテランの製図助手、坂井さんが、ニコニコしながら学生の顔を見ていた。まるでお茶の作法を見ているかのような。先生が図面を引く姿は背筋が伸び凛として美しかった。図面には何か聖なるものが宿っているのかもしれないと初めて感じた。

八一年夏。篠原一男先生の研究室では、竣工したばかりの「高圧線下の住宅」の雑誌発表用図面を厚手のトレペにロットリングでインキングしていた。平面図の角をピン角にする技法には驚愕した。ロットリングを角で止めるとダメになってエッジが丸くなる。そこで直行する線は、角で止めずにわざと線と線を直行させ、はみ出た部分を安全カミソリの刃を割って左右にこすって削ぎ落とす。そして虫眼鏡で見ても完璧な直角を創り出す。図面を書いている時間より削っている時間が数倍長い。研究室中にシャカシャカとトレペを削る音が響き渡る。修

### 各 人 各 説

## BIM図面に神は宿るのか

東京工業大学 教授

**安田幸一**

Koichi Yasuda



行僧が経を唱えるような音に聞こえた。

八三年、事務所に入所して美濃紙の素晴らしさを知った。林（昌二）グループには「一ッ幅に八本の線を引く人がいた」という伝説を聞いた。後年、パレスサイドビルの原因を見て伝説は本当だったと知った。鉛筆の濃淡が絶妙で、一瞬で図面が頭に入る。無駄な情報は一切省いている。プロの図面とはこういうものかと思いついた。レンガの目地を徹夜して一心不乱に延々と書き続ける。CADなら瞬時に終わる作業だ。でもその目地を書いている間、寸法やスケールや構法など様々なことに思いを馳せる貴重な時間でもあった。現在はスピードアップした反面、考える時間を放棄しているのだ。上手い人が描くと、間違いなく神が宿っていた。果たしてどうすればBIMの図面に神が宿ってくれるのか。BIM図面では容易にシミュレーションへ移行できる。図面同士の不整合もない。図面に何も神は宿らなくても、完成した建築に神が宿ればそれで良いのではないか。図面は契約するだけの道具で建築行為の一過程でしかないという論理だ。しかし、建築には寿命があり、建築が寿命を終えた後も図面は永遠に残るのも事実。

今、大学ではBIM時代の製図教育の在り方を議論すべき時期を迎えている。もう一度建築という行為の意味、図面の持つ意味を考え、今後の図面のあるべき姿を見つけ出さねばならない。